石附喜三男教授の逝去を悼む

内田　實

札幌大学女子短期大学部部長石附喜三男教授は、昭和六十一年三月二十七日午前六時四十五分入院先の札幌医大附属病院で結腸がんで逝去された。享年四十七歳。それは余りにも短い人生の終焉であり、誰れしもが耳を疑った事実であった。ひと一倍元気で、誰よりもよく飲み、すべての口に入るものは美味であり、何ものをも合せのむ程の腹をもった巨人であった。それに加えてその元気さが休むことを知らぬ知識慾とガリ勉ともいえるタフな勉強と行動力は、時として誤解すら招きかねない言動となって走りに走っていた。最近の特に五年間は年間考古学関係の単行本二〜三冊、論文数本という驚異的な成果をあげ、本業である大学の教授職の外に教務部長、短大部長を歴任しながらの業蹟であった。

石附教授は昭和四十二年同志社大学大学院文学研究科文化史学専攻博士課程を終えるや、同年開学した札幌大学へ専任講師として着任して以来二十年間教養部、短大部のほか学生部長、教務部長、短大部長を歴任し、一方で北海道大学兼任講師、北海道考古学会幹事、古代学協会委員・札幌支部長・評議員、日本民族学会評議員、日本海学会委員、江別市文化財保護委員会委員、江別市緑化推進審議会副会長、さらには江別市の小学校・中学校のＰＴＡの会長、江別市男性合唱団設立委員で団員という多彩な活動をこともなげにこなしていた。大学開学以来の他校にはみられない紆余曲折のなかで、専門家として、また信念の権化――誠実の化身としての行動は誰れもが認めるところであった。アメリカ留学から帰ってきてからの教授は円熟味を加え、広い視野から判断を下すというまれにみる管理能力も発揮していた。二月下旬少し腹の調子がおかしいので検査に行って来るといって一週間もすればすぐ帰るという気安さで入院した。教授の机の上には読み終った学術雑誌が山をなし、おそらく自宅のそれはさらに大変なものであったに違いない。大きなテーマが決まってまさに走り出す寸前の出来事であった。研究歴僅か二十年余の間に一一〇余編の著書論文を残していったことが、時間がたてばたつ程に今後の活躍の如何に大きなものが期待されていたかを考えると、本当にその急逝がおしまれてならない。考古学関係者によって教授の著作集が編集され、みやま書房から「アイヌ文化の源流」として本年十一月中旬に出版された。その本文は教授自身が昨年十二月に出版社に手渡していたのであった。また古代学協会や北海道考古学からも記念号が計画中であるという。やりたかった仕事のある部分は教授が育てた若い学徒が引きついで発展してくれるであろう。そしてそのイデーは学問上の遺産として引継がれるに違いない。

教授はこよなく植物に興味をもっていた。とくに野草について採集し、育て、その若芽をおしげもなく知人に配ってあるいた。或いは人生の有限に対する永遠の生命とのかかわりあいを意識せずに実践にうつしていたのかも知れない。崔塗と寒山の詩二首を添えて別れの言葉としたい。

送友人　　崔塗

登高迎送遠春恨併依依不得滄洲信空看白鶴帰

寒山

水清澄澄瑩徹底自然見心中無一事萬境不能転

心既不妄起永却無改変若能如是知是知無背面

出典　萬首唐人絶句第五巻、中国詩人選集5

なお石附教授の最後の論文となった「北海道考古学からみた蝦夷（エミシ）」古代文化　第三十八巻第二号を本誌に転載することについてこころよく御承諾下さった平安博物館館長角田文衛先生に御礼を申しあげます。

石附喜三男さんを悼む

吉崎昌一

あの賑やかだった石附さんが、突然に去ってしまった。私がカナダから日本に帰りついたその数時間前のことである。千歳空港から真直にお宅にかけつけると、「待っていたのだと思うよ……」と親族の方から嘆かれ、体から急に力が抜けてしまう。

彼が悪性腫ように犯されていたことは、かなり早い段階に夫人より伺っていたが、こんなに早く去ってしまうとは考えられないことであった。昭和六〇年の五月には、考古学調査旅行で中華人民共和国黒竜江省に同行したが、その折には疲れがたまる、といいながらもいつもの様に元気で、接待にあたっている中国側のスタッフの間でも人気抜群であった。連日続く夜の招待宴では、すすめられる六〇度の白酒に音をあげる私をみて、スピーチと中国式の乾杯を引受けて助けてくれた。考えてみると、この時の酒が彼の寿命を蝕ばむきっかけになったのではないかと今も後悔している。

札幌医大に入院しておられた時に、担当のドクターから病状の改善についての暗い見通しを伺い、彼がベットの上に起あがれるうちに写真を撮影しておきたいと思いたった。丁度カナダに旅行するために新しいカメラを一台入手したばかりであったから、これに超高感度のカラーフイルムをつめてでかけた。彼もカメラ好きである。メカを説明しながらテストということで互いに撮影しあったのである。同時に夫人の希望もあって、彼と夫人のにこやかにほほえんでおられるシーンも収めることができた。彼の最後の写真と彼の最後の撮影がこれである。彼が撮影した最後の写真―それは私が被写体であるが―それと彼の写真は、いつもいくつかの調査行の思い出とともに、私の研究室の机の引出しのなかにある。

このプリントを彼に進呈した時に、両方の写真を見較べながら「元気っていいな、写りかたが違うな……」という。私の胸がうずいた。彼は重ねていった。「吉崎さん、もうこれからは好きな仕事だけしようよ。誰かが何とかいったってかまやしない。回復したら、一緒に車をとばしてあちらこちらを見てあるこうよ。こまかいことは若い連中に任せてさ、すこし奔放に考古学をたのしみたくなった」……と。

三〇年ちかい友人である。その気持が痛いほど分った。やりたい研究が雑務に追われて思うように進められなかった、と彼はいいたかったのであろう。「今年の秋になったら、また二人でどこか面白そうな所にでかけるか。それに擦文文化についても議論しなくてはね」。私にはそれだけしかいえなかった。

カナダ旅行中に会った友人達は、私の話を聞いて「良い考古学者ほど早く世を去っていく。なんということだ！　彼が悪性腫ように犯されているとは……」と嘆いていた。そしていくつもの御見舞いの言葉を託されたのだが、遂に生きている石附さんの耳にいれることができなかったのは残念である。